

## 不登校だった子ら通う学園校長 女性起業家大賞最優秀賞

聞き手・福井万穂 2021年1月22日 9時30分



佐賀星生学園校長の加藤雅世子さん=2020年12月25日午前9時9分、佐賀市多布施4丁目、福井万穂撮影

不登校経験や発達障害のある生徒らを受け入れる、佐賀市の高等専修学校「佐賀星生(ほっしょう)学園」。設立者で、校長の加藤雅世子さんが昨年、全国商工会議所女性会連合会の「女性起業家大賞」で、最優秀賞に輝いた。設立の経緯や、運営の工夫を聞いた。

### ——設立のきっかけは

元々、専修学校の教員をしていて、不登校だった生徒や、発達障害のある生徒を教える機会がありました。人と話すのにすごく緊張したり、自分をうまく表現できずに取り乱したりする姿に、接し方が分からず、戸惑いました。



専門的に勉強するべきだと思い、佐賀大の大学院に入って臨床心理学を学びました。その中で、子どもたちが「楽しい」「勉強がしたい」と思えるような“本当の学校”をつくりたいと考えるようになりました。 ——その後は

臨床心理士の資格を取り、公立学校のスクールカウンセラーとして働きました。分かったのは、中学校の先生たちが、不登校や発達障害のある生徒の進路に困っているということ。義務教育を終えた後、生徒たちが専門的な支援を受けながら学べる場所が必要だと感じました。

### ——星生学園の特徴は

「解決志向アプローチ」を実践しています。できないことではなく、できていることに注目して強化する、というものです。

例えば、遅れて来たときに怒るのではなく、「20分の遅れで済んで学校に来られた」ことを認めます。注意ばかりだと、「どうせ分かってくれない」と、何も話さなくなってしまう。まずは「それでいいんだよ」と伝えることが大切です。

——受賞では、「職員の持ち味をいかす環境づくり」も評価されました

先生たちにも同じアプローチをしているんです。大人になると、褒められることは少なくなって、うまくいかないと怒られる。それでは疲弊してしまいます。先生たちの間でも、「助かったよ」といった気づきや、感謝を伝え合うようにしています。

——業務効率化にも取り組んでいます

無駄な会議はせず、立ち話でもいいので、コミュニケーションを密に取るようにしています。スピード感をもって解決するため、事務作業は徹底的に省いています。

「立ち話でも」は、生徒に対しても同じ。呼び出して改めて話をしなくても、ちょっとした声かけ一つで元気になったりします。

——県の運営費補助金が増額されたそうですね

県の補助金は生徒1人あたり、私立高校が約37万円、高等専修学校が1万2500円でした。

私たちのような学校では、生徒に手厚いケアが必要。先生の負担は重く、思いだけでは働けません。頑張っている人に、十分な対価を支払えないジレンマがありました。

見直しを訴えた結果、2019年度から、約29万円への引き上げを実現できました。

——今後のビジョンは

最近では、生徒たちが「星生で自分はこんなに変わったんだ」と語ってくれる。「私たちが証人だ」が合言葉になっています。不登校や発達障害の生徒に限らず、「ここで学びたい」と思って来てくれる生徒が増えるといいな、と思っています。(聞き手・福井万穂)



かとう・かよこ 白石町出身。2011年、佐賀市多布施4丁目に「佐賀星生学園」を開校。生徒は約150人。16年から県教育委員を務める。

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.